

「しよう」の意味・用法

— 〈非難〉・〈願望表出〉の「しようよ」

山下由美子

◆要旨

「しよう」には多くの用法があるが、本稿では終助詞「よ」を伴った「しようよ」を、〈非難〉および〈願望表出〉の用法として取り上げた。〈非難〉は、当該行為が過去の時点において実現されなかった場合に用いられる。〈願望表出〉は現在の当該事態、また過去の出来事や状況に対して、話し手が回想的に当該事態の実現を望む形式で用いられる。いずれの用法にも、終助詞「よ」を伴うことで「聞き手めあて」性が顕著に現れる。

アンケートによる使用実態調査から、いずれの用法も30代以下の使用率が高いことが明らかになった。〈非難〉として使用する場合は親疎関係が大きく影響すると考えられ、〈願望表出〉は一般的に使用されているとは言えないことが分かった。

◆キーワード

しようよ、非難、願望表出、終助詞「よ」、使用実態

◆ABSTRACT

Although the Japanese expression *shiyō* has a large number of uses, this paper addresses the uses of the construction formed by appending the sentence final particle “yo” to it, forming the grammatical expression *shiyō-yo* for the purposes of “criticism” and “desire expression”. “Criticism” is used when an action in question was not realized at a point in the past. “Desire expressions” are used when a speaker retrospectively wishes to express a desired realization of an action in question with respect to actions occurring in the present, past actions, or past conditions. In each of these usages, the addition of the sentence final particle “yo” adds a marked “listener-targeted”-ness to the expression.

The results of a questionnaire survey clearly showed that the frequency of each of these usage patterns was high for people under the age of 30. We believe that the degree of interpersonal intimacy has a large impact on usage in expressing “criticism”, and our results revealed that the “desire expression” usage is generally not spoken.

◆KEY WORDS

Shiyō-yo, criticism, desire expression, sentence final particle “yo”, the use actual situation

The Meaning and Usage of *Shiyō* “criticism” and “desire expression”: *Shiyō-yo*

YUMIKO YAMASHITA

1 はじめに

モダリティの文末表現「しよう」は、多くの日本語学習用テキスト^[註1]の初級前半で提示される項目であるが、テキストで扱われる用法は、以下のように〈勧誘〉〈肯定の応答〉〈申し出〉〈意志形の導入〉に限られている。

- (1) A: 寒いですね。お茶を飲みましょうか。〈勧誘〉
 B: そうしましょう。〈肯定の応答〉 (『げんき』5課)
- (2) 駅まで迎えに行きましょうか。〈申し出〉 (『みんなの日本語』14課)
 —いいえ、けっこうです。タクシーで行きますから。
- (3) 今日は疲れたから、早く寝よう。〈意志形の導入〉
 (『新装版日本語初級』30課)

先行研究においては、テキストで扱われる用法に加え、「意志の表出」「決定の表明」「提案」「促し」(安達2002)、「命令的指示」(姫野1997)、「意思決定前の迷いの段階」「意思の決定段階」(宮崎2005)、「説得」「指導」「宣言」「提案」「相談」(宮崎2009)、「遠回しな命令」(工藤1989)、「とおまわしの命令」(仁田1991)、「やわらげた命令」(樋口1992)、「遠回しの命令」(宮崎2007,2009)のように、分類の仕方や用法の呼び方は統一されていない。用法自体があいまいであったり、各用法を示す用語も「勧誘」や「誘いかけ」など異なっていたりする場合があり、未だ「しよう」の用法整理は充分とは言えない。

本稿では、「しよう」が担う用法を「基本的用法」と「その他の用法」^[註2]に分け、その中から、終助詞「よ」を伴った「しようよ」を、〈非難〉および〈願望表出〉の用法として取り上げる。これらの用法は近年、日常会話やインターネット上の書き込みなど若者を中心に用いられていると考えられるため、アンケート調査を行いその使用実態を探る。また、これらの用法がどのような特徴を持って使用されるかを分析し、明らかにすることを目的とする。

2 「しよう」の基本的用法

まず、本稿では、日本語学習用テキストで扱われる「しよう」の形式を「基本的用法」とした。表1は、姫野(1997,1998)の「行為指示」の有無を基準とし、坂本ほか(1993)の行動展開表現の分類基準を参考に、「しよう」の基本的用法を立てたものである。各用法に対し、「行為者」「受益者」「決定権者」がそれぞれ話し手(S)であるか聞き手(H)であるかに基づき分類した。また、典型的文型では、各用法について日本語学習用テキストで扱われる典型的な文型を挙げた。

表1 「しよう」の基本的用法

行為指示	用法	行為者	受益者	決定権者	典型的文型
○	勧誘 (引き込み型)	SH・H	SH・H	H	しないか、しよう
○	勧誘 (グループ型)	SH	SH・H	H	しないか、しよう、しようか
×	申し出	S	H	H	しよう、しようか
×	意志決定に伴う宣言	S	* ^[註3]	S	する、しよう
×	意志未定の表出	S	*	S	どうしよう(か)

次に、表1でまとめた基本的用法を、その条件と例文からみていく。

2.1 勧誘(引き込み型)

特徴：話し手の実行しようとしている行為に聞き手を引き込んでいく。「しようか」は引き込み型の勧誘としては機能しない。(安達1995)

- (4) あなたもこの饅頭を食べよう／*食べようか。(安達1995)

2.2 勧誘（グループ型）

特徴：話し手と聞き手をひとつのグループと見なし、聞き手にも話し手と同じ行為の実行を求める。
(安達1995)

- (5) F088：もういい？ じゃあごはん食べいこっか。
F152：そうしましょっか。 (名大)

2.3 申し出

特徴：聞き手を行為者に含まず、聞き手の利益になると思われることを、話し手の行為で実行しようとするもので、決定権は聞き手である。

- (6) 「このベルクロの比翼仕立て（フライジャケット）いいですね。私もほしいな」
「お取り置きしましょっか」
「いえ、お金が貯まったらまた買いに来ます（笑）」 (スタイリスト)

2.4 意志決定に伴う宣言

話し手が迷いの段階を経て意志決定をし、それを表明するための発言である。話し手自身の独話や心内発話として用いられる場合と、聞き手が存在し対話的に用いられる場合がある。迷いを経た決定段階であり、通常は「しようか」の疑問形式でなく「しよう」の形で現れる。

特徴：行為志向的発話であるが、その発話自体が行為として完結している。
(山岡2008要約)

- (7) F093：私は好きだけど。そんなくどくないことない？
F101：うーん、じゃ、キャラメルにしよう。 (名大)

2.5 意志未定の表出

話し手が意志決定をする前の迷いの段階にありながら、その迷いを発話として表す場合である。聞き手が存在し対話的に「どうしよう」「いつにしよう」など疑問詞と共起して用いられる場合や、主に話し手の独話や心内発話として「行こうか帰ろうか」など選択疑問文が用いられる場合がある。

特徴：発話自体が行為として完結するための、意志決定前の段階を表す。

- (8) F036：ケーキ食べる？
F057：ケーキどうしよう。私、結構おなかいっぱいになっちゃった。
(名大)

3 〈非難〉の用法

本章では、「しよう」が担い得る「その他の用法」の中から〈非難〉の用法について考察する。〈非難〉では、過去の出来事について当該行為が過去の時点において行われなかった場合や、恒常的な振る舞いやマナー等が一般的または望ましい状態にないことに対し、直接的に非難を表す表現形式を用いず、終助詞「よ」を伴った意志表現が用いられる。

表2に〈非難〉の特徴を挙げたとおり、対話場面および非対話場面で用いられ、対話場面においては聞き手が対象者であるか否か、話し手が不利益を被るか否かで分類できる。非対話場面においては、対象者は存在するが、必ずしもそれが聞き手になるとは限らない特徴を持つ。

表2 〈非難〉の特徴

場面	H=非難対象者	S不利益
対話	○	○
		×
非対話	×	○
		×
非対話	△	○

3.1 対話場面

3.1.1 聞き手が対象者であり、話し手に不利益が生じる場合

(9) (待ち合わせの場面)

A: C君遅いね。

B: あ! C君、今日バイトで来られないってメール入ってたんだ。

A: それ、早く言おうよ。(作例)

会話参加者は友人同士のAとBである。話し手Aが直接聞き手である対象者Bに対し、「早く言おうよ」と発話している。話し手Aにとっては、友人Cが来られないことを知らされていなかったために、期待が裏切られたり、本来不必要な待ち時間を費やす羽目に陥ったりするなど、なんらかの不利益が生じている。

井上(1993)は「聞き手が動作実行のタイミングをのがした」ことに対する異議申し立ての命令文として(10)を挙げている。さらに、勧誘を表す「～(よ)う」も「よL」^[註4]「よね」が付加された場合は、発話時以前のことがらに言及できるとして、(11)を挙げている。

(10) (1日遅れでレポートを出しに来た学生に)

困りますねえ。ちゃんと昨日のうちにレポートを出してください(よL)。

(11) (締切日の翌日にレポートを提出しに来た学生に)

君ねえ、ちゃんと昨日のうちに原稿を出そうよL／よね。

3.1.2 聞き手が対象者であり、話し手に不利益が生じない場合

(12) (F023とF107が海外でバスに乗った際、降車ボタンを誰かが押すだろうと思っていたが誰も押さなかったため、乗り過ぎてしまった話をF128にしている)

F023: だれか押すと思ったんだよね。

F107: ほいで、押しゃあいいのに押しゃあへんかっただよ。

F128: <笑い> 押そうよ。

(名大)

会話参加者は女性3人の友人同士である。話し手F128が、直接聞き手である対象者F023とF107に対し「押そうよ」と発話しているが、話し手には聞き手である対象者がバスを乗り過ごしたことによる不利益は生じていない。

3.1.3 聞き手と対象者が異なり、話し手に不利益が生じる場合

(13) (コンパの待ち合わせの場面)

A: C君遅いね。

B: えっ? 今日バイトで来られないって、メール来なかった?

A: ウソ? 来てないけど。幹事の俺にメールしようよ。なあ?

B: そうだよ。(作例)

会話参加者は友人同士のAとBである。話し手Aが、聞き手であるBに対し「メールしようよ」と発話しているが、非難対象者はCである。幹事であるAは、Cの不参加を知らされていなかったために、コンパ開始時間間際になって、予約人数の変更を店側と交渉しなければならない負担という不利益が生じている。

3.1.4 聞き手と対象者が異なり、話し手に不利益が生じない場合

(14) (イギリスで両替の指示がうまく伝わらず、大量の5ポンド札を出されたときの話)

F107: なんでこんな5ポンド札が欲しいんだこいつらみたいなの。<笑い>

F128: 変な人たちだ、変な人たち、変な人たちだなあと思ったんだよ。でも聞こうよね。(名大)

会話参加者は女性3人の友人同士である。話し手であるF128が「聞こうよね」と発言しているが、この場合対象者はイギリスの銀行員であり、対象者不

在で聞き手に対し発話されている。

3.2 非対話場面

- (15) (食べログサイトに寄せられた、あるレストランの「ロコミ・評価」への書き込み)
いらっしゃいませぐらい言おうよ……。

不特定多数に閲覧されるインターネットへの書き込みなど、非対話場面で見られる。特定の対象者は存在するものの直接的な対話とは異なり、対象者への伝達は必ずしも確認できるものではない。

4 〈願望表出〉の用法

山岡ほか(2010)は〈願望表出〉の条件として、話し手は当該事態の実現を欲しているが、それは話し手の意志によってなし得る事態ではないとしている。

話し手にとって望ましい事態にないために使用される用法であるという点においては、〈非難〉の用法と共通する要素が含まれる。しかし、〈願望表出〉は現在または過去の時点において、当該事態の実現を話し手が欲している場合に用いられる。過去の当該事態実現を欲する場合については、話し手が回想的に過去の時点に回帰し、未だ実現されていない当該事態実現を欲する形で表される。

- (16) (M023は友人Dに電話をかけ、F128は母親に電話をかけているところ：M023、F128共に20代前半の男女)
F128：……お母さん出んし。出んし。出ようよ。
M023：もしもし、D？ 何しとん？ あんね、(中略)またね。
F128：もしもしお母さん？ ごめんね。はい、すみません。ファックス届いた？ (名大)
(17) (人工スキー場リニューアルオープン記念のナイター無料開放日に、混雑を予想して行ったにもかかわらず、予想外にすいていたことを綴ったブログより)

せっかくのナイター無料開放なのにみんなもっと来ようよ〜。

(くるくるクルーズHP)

(16)は「名大会話コーパス」、(17)はブログでの使用例である。(16)は、F128が母親に電話をかけ「早く出てほしい」という現在継続中の事態に対する願望を、「出ようよ」の形式で発話している。(17)は、人工スキー場が閑散としていたことに対し、書き手の心情が書き込まれたものである。書き手がスキー場にいたのは過去の時点であり、「みんなにももっと来てほしかった」と、回想的に過去の時点に回帰し、当該事態に対する願望を述べたものである。

5 終助詞「よ」の機能

〈非難〉および〈願望表出〉は、「しよう+終助詞「よ」」の形式で現れやすい特徴がある。白川(1992)は、終助詞「よ」の機能についての仮説として、「「よ」は、それが付加された文の発話が聞き手に向けられていることを、ことさら表明する」ものであるとしている。また、蓮沼(1997)は、広義の命令文において下降調の「よ↓」が付加される場合、聞き手における要求内容の理解が予め損なわれているような文脈で使われるとしている。そして、当然理解できるはずのことが理解できていないことに対する非難や苛立ちのニュアンスを伴う例として、(18)を挙げている。これを(19)のように「しようよ」に置き換えてみても、非難や苛立ちのニュアンスに変わりはない。

(18) たまには、掃除ぐらい手伝ってよ↓。

(19) たまには、掃除ぐらい手伝おうよ↓。 (作例)

白川(1992)は、上記の仮説の根拠として、「表出」の文など、本来「聞き手めあて」でない文に「よ」が付加されたとき「聞き手めあて」性が顕著に現れるとして、(20b)を挙げている。

(20)a. 酒が飲みたい！

b. 酒が飲みたいよ！

〈願望表出〉においては、白川（1992）が指摘するように、「よ」が付加しないと座りがよくないが、付加することで、(21b)のように誰かに向かって言うか、またはあたかも誰かに向かって言うかのような発話に変化する。

(21)a.*……お母さん出んし。出んし。出よう。

b. ……お母さん出んし。出んし。出ようよ。 (名大)

6 使用実態

6.1 調査概要

これまで見てきた各用法の使用実態を明らかにするため、10代から60代の男女125名に対し、アンケート調査を行った。調査対象とした125名の内訳は表3に示したとおりである。

表3 調査対象の性別・年代別

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	計(名)
男性	14	17	13	9	5	4	62
女性	12	25	13	6	3	5	63
計(名)	26	42	26	15	8	9	125

6.2 調査項目と結果

6.2.1 〈非難〉の用法使用実態

使用実態を調べるため、以下の質問項目を設けた。調査結果は、男性は表4、女性は表5に示したとおりである。男女いずれも、10代から30代までは、「使う」「場合によっては使う」が70%以上を占めているが、40代は男女とも66.7%が「使わない」と答えている。50代以上になると、「使わない」が100%を

占めている。なお、男女ともに最も使用率の高い世代は30代であった。

〈待ち合わせの場面〉

A: C君遅いね。
B: あっ！C君、今日バイトで来られないってメール入ってたんだっつ。
A: それ、早く言おうよ。

質問1. あなたがAだったら、下線部の表現を使いますか。当てはまるものに○をつけてください。

使う 場合によっては使う 使わない

図1 〈非難〉の用法アンケート質問項目

表4 〈非難〉使用実態（男性）

		質問1			
	年代	使う	場合	使わない	計
男性	10代	4(28.6)	6(42.8)	4(28.6)	14(100)
	20代	9(52.9)	4(23.5)	4(23.5)	17(100)
	30代	5(38.5)	7(53.8)	1(7.7)	13(100)
	40代	1(1.11)	2(2.22)	6(66.7)	9(100)
	50代	0(0)	0(0)	5(100)	5(100)
	60代	0(0)	0(0)	4(100)	4(100)
	計	19(30.6)	19(30.6)	24(38.7)	62(100)

表5 〈非難〉使用実態（女性）

		質問1			
	年代	使う	場合	使わない	計
女性	10代	1(8.3)	10(83.3)	1(8.3)	12(100)
	20代	7(28.0)	11(44.0)	7(28.0)	25(100)
	30代	2(15.4)	11(84.6)	0(0)	13(100)
	40代	1(16.7)	1(16.7)	4(66.7)	6(100)
	50代	0(0)	0(0)	3(100)	3(100)
	60代	0(0)	1(20.0)	4(80.0)	5(100)
	計	11(17.2)	34(53.1)	19(29.7)	64(100)

また、「場合によっては使う」の中で、どのような場合（相手）なら使うかを質問し、得られた回答が表6である。

表6 「早く言おうよ」を使う場合（相手）

	友人(親)	友人(疎)	先輩(親)	先輩(疎)	後輩(親)	後輩(疎)	初対面	計(名)
男性	48	18	12	3	33	20	6	134
女性	34	17	8	0	20	19	6	104

6.2.2 〈願望表出〉の用法使用実態

使用実態を調べるため、以下の質問項目を設けた。調査結果は、男性は表7、女性は表8に示したとおりである。女性10代のみ「使う」が50%を超えているが、それ以外は「使わない」が半数を超えている。また、男性40代に「使う」が1名(11.1%)いるものの、40代以上は男女ともに「使わない」がほぼ100%近くを占めている。

質問2. あなたは独り言など、直接本人には言わなくても「～してほしい」「～だったらなあ」という意味で、次のような表現を使いますか。どちらかに○をつけてください。

(友達に急ぎの用で電話をかけ、出るのを待っているとき)
早く出ようよ。(使う・使わない)

図2 〈願望表出〉の用法アンケート質問項目

表7 〈願望表出〉使用実態(男性)

		質問2		
	年代	使う	使わない	計
男性	10代	3(21.4)	11(78.6)	14(100)
	20代	6(35.3)	11(64.7)	17(100)
	30代	1(7.7)	12(92.3)	13(100)
	40代	1(11.1)	8(88.9)	9(100)
	50代	0(0)	5(100)	5(100)
	60代	0(0)	4(100)	4(100)
	計	11(17.7)	51(82.3)	62(100)

表8 〈願望表出〉使用実態(女性)

		質問2		
	年代	使う	使わない	計
女性	10代	7(58.3)	5(41.7)	12(100)
	20代	7(28.0)	18(72.0)	25(100)
	30代	2(15.4)	11(84.6)	13(100)
	40代	0(0)	6(100)	6(100)
	50代	0(0)	3(100)	3(100)
	60代	0(0)	5(100)	5(100)
	計	16(25.0)	48(75.0)	64(100)

6.3 考察

いずれの用法も、30代以下に比べ40代以上の使用率は低くなっている。〈非難〉は、「使う」「場合によっては使う」が男性61.2%、女性70.3%と半数を大きく超えているが、使用する相手として「親しい友人」「親しい後輩」が最も

多いことから、使用には親疎関係が大きく関与していることが分かる。そこから、〈非難〉には聞き手が非難対象者である場合、対象者への改善を強く要求したり、話し手の不利益が甚大であることを表明したりする「真の非難」と、同様の形式でありながらも「真の非難」ではなく、親しい間柄で使用されるコミュニケーションの形式として用いられる場合があると考えられる。

〈願望表出〉は、「使う」と回答したのが男性17.7%、女性25.0%であり、女性10代の使用率が58.3%と高いものの、「使わない」が大部分を占めることから、一般的に使用されるには至っていないことが分かる。

7 まとめ

本稿では、基本的用法に含まれない形式の「しよう」の中から、〈非難〉と〈願望表出〉の用法について考察し、その使用実態についてアンケート調査を行った。〈非難〉は、聞き手が非難対象者であるか否か、また話し手の不利益の有無によって分類できる。アンケート調査から、親しい友人や後輩など、使用する相手を選別していることから、〈非難〉にも、親疎関係・文脈・場面等様々な要因により、「真の非難」と、親しい間柄において使用される場合とが存在すると言える。〈願望表出〉は、独話的性質が強く、実際に発話される例よりもインターネット上の書き込みなどで散見される特徴がある。アンケート調査からは、女性10代においては使用率が半数を超えているが、それ以外の年代での浸透率はまだ低いことがわかった。

〈非難〉の用法の使用実態から、後輩に対しては「親・疎」ともに多く使われていることが明らかになったが、立場上の上下関係の中でも、目下の者への使用が多く見られるかは今後の課題である。さらに、〈非難〉に含まれる「真の非難」と、親しい間柄において使用される場合のしくみについても詳しく調べていきたい。今回の調査では扱えなかったが、「しようよ」の使用の有無には、話し手の生育地の方言的要素との関係も考えられるため、さらに調査を行いたい。

〈非難〉の用法として、「しよう↑」と「よ」を伴わずに使用される場合もあるが、本稿では検証できなかった。終助詞「よ」が〈非難〉の用法においてど

れだけの意味を持つのかは今後明らかにしていきたい。また、[注2]で紹介した「その他の用法」についても、機能の分析や使用実態の調査を通し、今後「しよう」が担い得る用法の分類を行っていきたい。

〈創価大学〉

注

- [注1] ……『初級日本語』『初級日本語 文法解説 [英語版]』『初級日本語 げんき I・II・教師用指導書』、『新装版 日本語初級 I、文法説明 韓国語版』『新文化初級日本語 I・II、教師用指導手引き書』『みんなの日本語 初級 I・II 本冊、教え方の手引き』を調査した。
- [注2] …… 姫野 (1997,1998) を基準にし、「その他の用法」としてまとめたのが次の表である。なお、〈願望表出〉は独話など他者への伝達を意図していない場合にも用いられるため、表には含まない。

行為指示	用法	行為者	受益者	決定権者	典型的文型
○	命令的指示	H	S	S	しろ、しなさい、してください
○	丁寧な指示	H	S・H	S	してください、お〜ください
○	恩恵的指示	H	H	S	しなさい、してください
○	説得	H	SH・H	H	したほうがいい、しなさい
○	保護者的指示	H	*	S	しなさい、しようね
○	助言要求	S	S	S	どうしよう、どうしたらいいか
○	教示要求	S・SH	*	H	疑問詞〜しよう (か)
○	提案要求	S・SH	*	S・H	疑問詞〜しよう (か)
×	提案	*	*	*	したらどうか、しよう、しようか
×	助言	H・H(※)	H	H	したらどうか、したほうがいい
×	非難	*	*	*	しなさい、しろ、するな

助言の行為者「H(※)」は不特定多数のHを指す。

- [注3] …… *は「行為者」「受益者」「決定権者」が誰であるかが関与していないことを表す。
- [注4] …… 「よL」は、「よ」が低く下降調につくことを示す。

参考文献

安達太郎 (1995) 「シナイカとショウとショウカー勧誘文」 宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』 pp.226-234. くろしお出版

安達太郎 (2002) 「第1章 意志・勧誘のモダリティ」 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 『新日本語文法選書4 モダリティ』 pp.18-41. くろしお出版

井上優 (1993) 「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」—命令文・依頼文を例に」 『研究報告集14』 pp.333-360. 国立国語研究所

工藤浩 (1989) 「現代日本語の文の叙法性 序章」 『東京外国語大学論集』 39, pp.13-33.

坂本恵・川口義一・蒲谷宏 (1994) 「「行動展開表現」について—待遇表現教育のための基礎的考察—」 『日本語教育』 82, pp.47-58.

白川博之 (1992) 「終助詞「よ」の機能」 『日本語教育』 77, pp.36-48.

仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房

蓮沼昭子 (1997) 「終助詞「よ」の談話機能—その2—」 『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』 pp.581-599. 凡人社

樋口文彦 (1992) 「勧誘文—しよう、しましゅう—」 言語学研究会 (編) 『ことばの科学5』 pp.175-186. むぎ書房

姫野伴子 (1997) 「行為指示型発話行為の機能と形式」 『埼玉大学紀要』 33(1), pp.169-178.

姫野伴子 (1998) 「勧誘表現の位置—「しよう」「しようか」「しないか」—」 『日本語教育』 96, pp.132-142.

宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求—』 ひつじ書房

宮崎和人 (2007) 「くまちのぞみ」と〈発動〉の間」 『岡山大学文学部紀要』 48, pp.77-89.

宮崎和人 (2009) 「談話における意志の形成」 『岡山大学文学部紀要』 52, pp.113-126.

山岡政紀 (2008) 『発話機能論』 くろしお出版

山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』 明治書院

参考資料

『初級日本語』 東京外国語大学留学生日本語教育センター編著 三省堂

『初級日本語 文法解説 [英語版]』 東京外国語大学留学生日本語教育センター編著 凡人社

『初級日本語 げんき I』 The Japan Times

『初級日本語 げんき II』 The Japan Times

『初級日本語 げんき 教師用指導書』 The Japan Times

『新装版 日本語初級 I』 東海大学留学生教育センター編 東海大学出版会

『新装版 日本語初級 I 文法説明 韓国語版』 東海大学留学生教育センター編 東海大学出版会

『新文化初級日本語 I』 凡人社

『新文化初級日本語 II』 凡人社

『新文化初級日本語 I 教師用指導手引き書』 凡人社

『新文化初級日本語 II 教師用指導手引き書』 凡人社

『みんなの日本語 初級 I 本冊』 スリーエーネットワーク

『みんなの日本語 初級 II 本冊』 スリーエーネットワーク

『みんなの日本語 初級 I 教え方の手引き』 スリーエーネットワーク

『みんなの日本語 初級 II 教え方の手引き』 スリーエーネットワーク

用例出典

「ぐるぐるクルーズ」HP

<http://www.netwave.or.jp/~cruise/team3.htm> (2013年7月3日参照)

食べログ神奈川

<http://tabelog.com/kanagawa/A1408/A140804/14041389/dtlrvwlst/3579167/> (2013年6月28日参照)

名大会話コーパス

<http://dbms.ninjalac.jp/nknet/ndata/> (2013年6月25日参照)

武藤直路 (2000) 『スタイリストになるには』 ぺりかん社
